Next Innovation
～時代を動かす能力と決断～

社会福祉法人 北伸福祉会
理事長　北本 廣吉 氏

6月29日に88歳の米寿を迎えた、朱鷺の苑グループ・社会福祉法人北伸福祉会（金沢市岸川町）の北本廣吉理事長。昨年12月に創立30周年という大きな節目を迎えた北伸福祉会だが、北本理事長がその福祉事業に歩み出したのが58歳の時だった。そして今や、職員数が600人を超え、年間延べ約40万人以上のお世話をする一大福祉グループに成長させた。これまでの88年間の人生の歩みは、まさに時代を切り拓く挑戦の連続だったと言える。

きたもと・ひろきち　1925（大正14）年6月、金沢市生まれ。15歳で満州に渡り、現役兵隊で終戦。極寒のロシア抑留から引き揚げ、酪農業を経て、65（昭和40）年に丸源運送を創設。北陸佐川急便に名称変更し、社長に就任するが、後に事業を譲渡する。その後、福祉の世界に進み、83（昭和58）年、北伸福祉会として日本海側で初めて盛弱児施設「あすなろ学園」を開設し、85年から同福祉会理事長。2008（平成20）年、秋の叙勲で瑞宝単光章を受章した。88歳。

米寿迎え、決意新たに
「30年先の夢に挑戦する」

平和への思い、誰よりも

9人兄弟の7番目として生まれた北本氏。幼少期から「何とか、両親に親孝行をしてあげたい」との気持ちを胸に、15歳で満蒙開拓団の一員として、大きな夢を抱いて海を渡った。しかし、年端のいかない少年にとって、満州での体験は言葉で言い尽くせないほど、厳しい毎日だった。その後、徴兵され、終戦後は極寒のロシアに抑留となった。周囲の仲間が寒さと過労で次々と倒れ、亡くなっていく姿を横目に見ながら、自分自身も幾度となく、生死をさまよう極限の体験を繰り返しながら、奇跡的に生還した。

帰国後、結婚し、夫人と野菜をリヤカーに積んで売り歩いたり、酪農業を経て、1965（昭和40）年、丸源運送を興し、運送業をはじめた。当時はまだ、舗装された道路も少なく、現在のような道路事情とはかけ離れた時代だった。

その後、北陸佐川急便に名称を変更し、社長に就くものの、後に事業を譲渡することとなった。

そして、社会福祉の現状に心を痛め、福祉の道に進むことを決断。1982（昭和57）年、社会福祉法人北伸福祉会を設立する。障害の有無にかかわず、あらゆる人たちが同じ社会で生活する『ノーマライゼーション』を掲げ、翌1983（昭和58）年、穴水町で日本海側では初めてとなる盛弱児施設（現在の児童養護施設）『あすなろ学園』を開設した。北本理事長は「創設時、児童数3人、職員12人だったが、当時の中西陽一知事が『朱鷺の苑欧』の作詞をしてくれた。今、改めて感謝の気持ちでいっぱいになる」と振り返る。

その4年後の1987（昭和62）年、『養護老人ホーム朱鷺の苑』を開設し、高齢化社会の到来に備えた、高齢者福祉事業に本格的に参入していくことになる。当時では珍しい金銭個別化を取り入れるなど、すでに北本理事長の時代に先駆ける新鮮なアイデアが次々と生まれていく。

以後、金沢市内でケアハウス、デイサービスセンター、特別養護老人ホームなど30の施設を開設していく。

6月30日に開催された「米寿を祝う会」で金色のちゃんちゃんこ姿の北本理事長㊨と374名の朱鷺の苑グループ職員による匿の字を描いた記念撮影（写真提供／北伸福祉会）

気力とアイデアで活路ひらく

最先端技術に関心

北本理事長は福祉事業を展開しながら、常に時代の最先端技術に関心を寄せ、積極的に導入を図ってきた。法人設立の翌年、1983（昭和58）年にはいち早く、ソーラーシステム（太陽熱給湯システム）を採用したほか、その後、太陽光発電システム、ガス自動車や電気自動車を取り入れた。今、省エネやエコ、地球環境への配慮は当然のこととなっているが、北伸福祉会では30年前からそうした取り組みを続けている。

法人本部がある『金沢朱鷺の苑』では福祉先進国・デンマーク製のベッドを導入、車イス専用のエスカレーター『助く歩道』の設置で世間をあっと驚かせたのも記憶に新しい。JR金沢駅近くの『中央金沢朱鷺の苑』には屋上緑化を施し、ヒートアイランド現象の抑制を図っている。近年は照明器具にLED照明を導入し、省エネ効果を高めているほか、雨水を庭の水やりなどの雑用水に有効活用し、光熱費に要する経費の節減、環境負荷の低減によると地球にやさしい技術を大いに取り入れている。

また、朱鷺の苑グループでは天然温泉を全施設に配湯していることも特筆される。法人内施設（5ヵ所）で掘削した天然温泉を毎日、タンクローリーで全施設に配湯し、「徳しの湯・試しの足湯」として、入所・通所者の機能回復、健康増進に加え、地域への開放に向けた取り組みも進めている。

2012（平成24）年3月、朱鷺の苑発祥の地に法人創立30周年の節目として、また、18ヵ所目の施設となる『デイサービスセンター朱鷺の苑穴水』がオープンした。北本理事長は「皆さんに育てられ、ここまで来ることができた。地域が潤い、長く長く後世に役立つ施設にしていきたい」と思いを込めた。同年10月の創立30周年記念式典では多くの出席者を前に「金沢が日本一、石川県が世界一になるよう、しっかりと努めていきたい」と決意を述べた。12月にはサービス付き高齢者向け住宅3施設－225戸を一挙に開業。新たな福祉ビジネスをスタートさせた。

北本理事長は毎年、年の初めに基本方針を打ち出してきたが、何よりも底流にあるのが、戦争体験者としての平和への思いだ。「日本は戦後、世界一の長寿国家・平和国家として自律し、世界から称えられた。それはみのお年寄りが一生懸命に働き、平和な日本をつくってくれたからだ。その思いを本切にしなければならない」と言ってはばからない。

新たに絆館オープンへ

6月に米寿を迎えたものの、日課である夜が明けきらないうちの金沢市内の巡回も欠かさない。街の様子をじっくりと観察し、これまで長年、培ってきた自身の五感をフルに働かせ、福祉ビジネスへのアイデアに活かす。高齢者のかは、事業に対する気力やアイデアは衰えるどころか、ますます生気がみなぎる。世界最高寿を目指して意欲的だ。

今年4月、JR金沢駅前に都市型快適住宅『朱鷺の苑やわらぎ』をオープンし、元気なシニアライフの支援をスタートさせた。一連の8事業展開式ではこう述べた。「皆さんに支えられ、育てられたおかげ。皆さんの尊さが資本。まだまだがんばっていきたい」と感謝の気持ちを表し、8月、そこに『絆館』と命名したコミュニケーション空間をオープンさせるなど、溢れ出るアイデアは留まることを知らない。

法人発祥の地である穴水町、奇しくもトキが本州で最後に捕獲された場所でもある。そのトキにあやかり、トキのように優美に羽ばたくという意味を込め、朱鷺の苑という名称を続けてきた。トキの学名は『ニッポニア・ニッポン』。まさしく日本を代表するものであり、北伸福祉会もこれにあやかり、日本、世界に羽ばたく福祉ビジネスを目指す。

いよいよ2014（平成26）年度末には北陸新幹線の金沢開業を迎える。北本理事長の『30年先の夢』は今後さらに30年、これまで培ってきた福祉事業を進化させ、福祉を通して、国際的に評価される地域を目指すというものだ。「今の世の中、経済戦争ばかりだが、私たちはお金で人を預かっているのではない。365日休むことなく、大事な人間の命の尊さを預かっているんです。それが私の役割なんです」という言葉の奥に、常に人と社会への思いやりをモットーにしてきた揺るぎない信念がにじみ出る。

おもてなしの真心で幸せ社会の構築を
朱鷺の苑グループ　社会福祉法人 北伸福祉会
金沢市岸川町ほ5番地　TEL（076）257－7100
FAX（076）257－7200